

…ボランティアがつくるニュースレター…

作 成…トラスト通信ボランティア
発 行…(一財)世田谷トラストまちづくり

〒155-0031
世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階
Tel・03(6407)3311 Fax・03(6407)3319
<http://www.setagayatm.or.jp/>

トラストネットワーク



民家園の雛飾り

No. 75 2017年3月

2月26日の日曜日、次大夫堀公園の古民家で、文化財資料調査員*による解説会がありました。

雛祭りの起源は平安時代にまで遡り、中国から伝来の上巳の節句(陰暦3月の初の巳の日)と、ひとがたに託して厄を流す祓の儀式や、日本にもともとあった子どもの遊び人形が合体して出来たものと言われ、源氏物語絵巻にも登場している。

室町時代には、女兒の誕生に人形を贈って祝う習慣が成立していた。いろいろな人から贈られた人形は形も大きさも当然不揃いであった。時代と共に、人形は初期の厚紙を貼り合わせて作った素朴なものから、衣装に刺繍をほどこした豪華なものへと変化し、その目的も「遊ぶ」から「飾る」へと移行、江戸時代には三人官女や五人囃子、隨身などが加わり調度品も増えて、ほぼ今の形になった。と、その変遷の歴史を実物を目の前に見ながら知ることができました。

ちなみに段飾りが定着したのは昭和



江戸・明治時代の雛人形
(次大夫堀公園民家園)

初期、それも 昭和時代の雛人形
デパートがセット (岡本公園民家園)
で売り出したのがきっかけとか……。

次大夫堀公園民家園では江戸時代・明治時代、岡本公園民家園では大正・昭和の雛人形が飾られ、それぞれ職員の皆さんが朝からちらし寿司や蛤お吸い物などを供えていました。

雛人形、雛祭りには、地域性や時代性が濃く反映されています。昔の、細面の享保雛や古今雛、押絵雛、埼玉県鴻巣で作られた鴻巣雛……どれも珍しく貴重な品々、これらが区民からの寄贈品であるのも嬉しく思いました。

*世田谷区教育委員会



松本押絵雛 江戸後期

75号の目次

民家園の雛飾り	1
ジャガイモの植え付け	2
すみれ場の冬と遊ぼう	3
せたがや散歩道	4
サギソウ寄せ植え講習会	7
かわらばん	8

瀬田農業公園分園 体験イベント

じゃがいもの植え付け

2月25日（土）午前10時から瀬田農業公園分園で体験イベント「じゃがいもの植え付け」が開催されました。

当日は、風もなく穏やかな日差しの中で、あらかじめ申し込んであった人達の中から抽選で選ばれた17家族、55人ほどが参加しました。

最初に挨拶があり、続いて、いもを植える際の説明などがあり、そして、「今回植える種いもは大きいので、皆さんに種いもを2つに切ってもらいます。皆さん、作業台の所のところへ移動してください。」ということで、参加者が畑の隅にある作業台に移動しました。作業台には、箕(昔から使われている農具の一つ)、マナイタ、包丁、草木灰などが用意されていました。そして、各家族に種いもが2個ずつ配られ、その種いもを切る役目は子供達でした。本当に、真剣に、種いもとにらめっこし、芽を確認しながら、いもにつけられている黒印を上にして、縦に2つに切り分けました。切り終わると、いもの切り口に草木灰をまぶしました。草木灰は、いもの腐敗を防ぎ、また肥料になります。



いもの種を切り分けると、植え付けです。畑の一角に土を盛り上げた約15m位の長い畝（うね）が3列作られていました。畝と畝との間隔は2尺2寸(約66cm)。この畝に1尺2寸(約36cm)間隔で種いもを植え付けます。

いよいよ、長い畝の前に一列に並び、じゃがいもの植え付けです。盛土のところに、種いもの高さの3倍の深さの穴を5つ、掘ります。種いもを植え付けた時に、種いもの3倍の高さの土が被せられるようにするためです。ところが、係員がビックリ。「皆さん手袋をしないのですか。」と声をかけても一向に気にしない。土遊びは素手の方が楽しいもの。穴を深く掘り過ぎて埋め戻したり、浅い・深いと楽しそうでした。なにしろ、お父さん、お母さん公認の土遊びですから。



種いもを植え付けたら、いもが見えなくなる位、ほんの少し、土をかけます。種いもの上に山のように土をかけた子は、あわてていもを掘り出しました。種いもの上に配合肥料(窒素・リン酸・加里を混ぜ合わせたもの)を一握り撒いて作業は終わり。なおソウカ病やヨトウムシ等の予防剤の散布や、最後の土かけは係員が行うとのこと。そして4月の芽かき、7月上旬の収穫の際にまた農園に来ることを約束して解散となりました。

東京農業大学ワークショップ すみればの冬と遊ぼう

2月18日午後1時30分、前日とうって変わって曇りで、肌寒い日でしたが、沢山の参加者を得て、すみればの冬と遊ぼう(東京農業大学ワークショップ)が「桜丘すみれば自然公園」で開催されました。

まず、開催の挨拶の後、このイベントの内容の説明と、そして地図を渡されて宝物が埋設されている場所と、宝物を見つけた時の処置について説明を受けました。宝物は、小さな箱に入ったカマキリ等の写真を印刷したカードで、すみればの屋外を、もりゾーン(森)、みずゾーン(池)、はらっぱゾーン(芝生)の三つに区分して隠されていました。



屋外に再度集合し、号令一番、いっせいに子供達はそれぞれの

ゾーンに向かってスタート。一番近い「はらっぱゾーン」に向かった子は、1分もしないうちに宝の箱を持って帰ってきました。宝箱は24個埋められていて、1人で2つから3つ見つけた子もいたようです。最後の1つは、若干時

すみればたんけんマップ



間がかかりましたが、無事、24個を探し出しました。

次は、2班に分かれて冬の昆虫探検。まず、第1班はもりゾーンから。クヌギの大木の根元で落ち葉の裏に張り付いている昆虫の幼虫探し。何分にも森の中ですから落ち葉が山ほどあり悪戦苦闘。とうとうギブアップ。係員が確保していた幼虫を見せてもらいました。

次はみずゾーン。池の中を覗きましたが、ヤゴもメダカも落ち葉の下に隠れて見えず、冬の生活を写真で確認。

そして、原っぱの真中にあるカヤのやぶでヒキガエル等を探したのですが、これも見当たりません。次は、垣根に産み付けられたカマキリの卵。皆んなで真剣に探した結果2つ発見。

最後は、石垣の中で冬眠をしているヒキガエルを見学。石垣の大きめな穴の中を懐中電灯で照らすと、なんと、



大きなヒキガエルの背中と足が見えました。これには皆さん大満足でした。

部屋に戻り、大きな図面に記載された昆虫等の夏の生活場所及び冬の生活場所の説明を受け、宝探しに使用したカードと小箱をお土産に貰って午後3時に解散。大学生さん達の、児童達に自然の息吹を感じさせ、自然に親しませる努力に頭が下がった1日でした。当日の参加者は児童21人、大人19人。東京農業大学の学生10人。すみればのボランティアのメンバー10人でした。

せたがや^入散歩道

荒玉水道道路を探る その2

分離帯のある水道道路は、小田急線の高架をくぐり、しばらく直進が続きます。やがて環八通りに差し掛かると、ここで道路は断たれ、水路は地下を通り続けているようにみえます。やむを得ず近くの歩道橋を渡って環八通りを越え、ちょうど反対側の地点で水道道路の続きへと進みます。



環八通りを越えて



平坦なやや広くなった感じがする道を約1km進むと烏山川緑道に差し掛かります。小高く盛り上がった地点に緑道が続き往時の水路を思い浮かべさせます。



約500m先の右側に「(区立)土と農の交流園」(桜上水2-11-1)があります。野菜、花、樹木づくり等を通じ



て高齢者の活動の充実を図るための施設です。研修室や休憩室が備えられ、相互の交流が図られるようです。

真言宗の寺院、密蔵院(桜上水2-24)が近くにあります。この本堂の建立は1744年です。石像の七福神が印象的です。

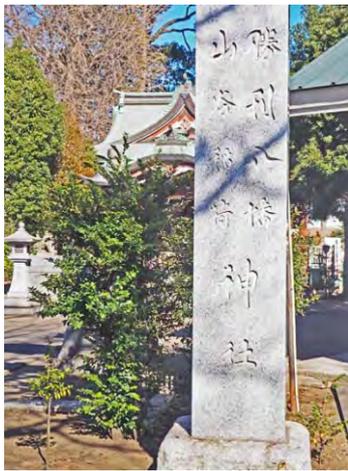


密蔵院の七福神



さらに数十m進むと交番、その右側にある勝利八幡神社(桜上水3-21)へ

と進みます。旧本殿は区内最古で1788年に建築されたものです。石碑には勝利八幡、山谷稲荷神社と併記されて、明治40年に合祀された事を表しています。



旧本殿



旧本殿の覆い小屋

勝利八幡から東側一帯、桜上水駅までは日大文理学部、日大桜丘高校、松原高校、松沢中等が続いています。

桜上水駅に向かい道路は緩い下り坂が続く、下り切ったところが京王線の踏切で、その左側が桜上水駅舎となっています。ここで水道道路は二回目の分断に合います。水路はおそらく地下深く線路を潜っているのでしょう。



踏切を渡りすぐ右に進んだ所に水路が続くと思われる場所があります。

水道道路は再びそこからスタートし、杉並区との区境を越え、続いています。杉並区内に入り甲州街道を横切りますが、そこでは少し離れた地点で横断歩

道を渡らざるを得ません。三度目の分断です。渡り切って少し進むと歩道に面した民家の屋根に子象の姿が、何か？とよく見れば竹細工が飾られていました。



竹細工の子象

子象の先を曲がると、右図の様な標示板があり水道道路に入ったことが分かります。



水道道路の標示板

約100m進んだところに盛り上がった地形の場所、玉川上水跡の緑道に出ます。



玉川上水緑道



この上流は久我山辺りを通り、下流は大原と北沢五丁目あたりで掠めるように区内を通り抜けています。

さらに水道道路を北方に進みます。道路は緩やかな傾斜になって500mほどで神田川に出会います。井の頭公園の池から発した流れは蛇行を繰り返しながら最後は東京湾に注いでいます。地形的に大雨の際に洪水を起こしやすい河川で、各所で被害を受けていたようです。最近では貯留施設などにより改善されています。水道道路が如何にしてこれを渡るのかに興味を持ち取材に歩きました。



神田川 神田橋から上流側を見る



神田橋 上流側から見る

神田川に掛かる橋、神田橋は比較的小柄な鉄製の橋で、その中心側を対向二車線の車道、外側に欄干を設けて歩道を構成した橋です。交通安全に留意されていると感じました。

さて水路ですが、橋の両外側に2本のパイプが沿っているのを発見しました。しかしその直径が30cmほどで、その太さではあの野川の水道橋や、大蔵の水道橋で見た太いパイプと比べ奇異に感じました。後ほど東京都

水道局に確認したところ、主水路は直径80cmのパイプで川底に埋設され、橋に沿っている2本の内の1本が副水路だそうです。



永福二丁目から神田川を越えて桜上水を見る

神田橋を後にして水道道路を進みます。振り返ると神田川を谷にして桜上水方面が見え、神田川が雨天時、雨水が流れこみ、溜まることに納得の行く気がしました。

さらに永福二丁目の平坦な道を進みます。その先に井の頭通りがあるせいか、両方向ともこの道の交通量は相当なものです。

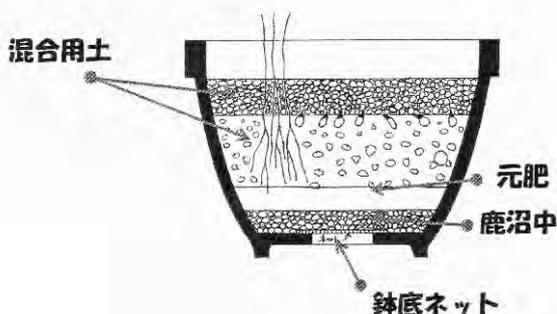
目前に井の頭通りが見えてきました。ここは信号のある交差点、信号機の横にある標示板に「荒玉水道」と記されています。それを見て、あらためてここまで来たのだ、と感動しました。(完)



フラワーランド

サギソウ寄せ植え講習会

3月6日(月)午後1時30分からフラワーランドで「サギソウ寄せ植え講習会」が開催されました。当日の午後は小雨まじりの肌寒い日でしたが、参加者は15名(男性6名、女性9名)、はじめてサギソウの講習会に参加した方は1名でした。最初に、(一財)世田谷トラストまちづくりの担当者の挨拶、フラワーランドの歴史・今後の講習会の予定などの話の後、サギ草の寄せ植え開始。机の上には、山草鉢(五号)とネット、鉢底用ごろ土(紙コップに8分目位)、肥料(マグアンプ少々)、ビニール袋に入れられた培養土(鹿沼土7:水苔3)、サギ草の球根8球、ベニチガヤ、セキショウが並べられていました。



まず、講師の指示に従い、鉢底のネットを指で押さえながら、鉢底用ごろ土を鉢に入れます。次に鹿沼土と水苔がよく混じるようにビニール袋の培養土をもんだ後、カップに半分ほどの土を鉢に入れて均し、肥料のマグアンプを散布しました。さらに、土をカップ一杯ほど鉢に入れて、いよいよベニチガヤの植え込みです。ベニチガヤの根をカップから取り出し、根を整えて水苔で巻いて植えるのです。ベニチガヤは冬枯れで葉が切り取られており、これから伸びる赤い芽が見えにくく、また根全体が

細長くて折れやすいため、どう処理するか苦心惨憺。次がセキショウの植え込み。これも根を水苔で巻いて植えるのですが、「寄せ植え」なので、鉢全体のバランスを考慮しなければなりません。ところが、サギソウは球根で、ベニチガヤも冬枯れのままですから、鉢全体のバランスを考えながら植えてくださいといわれても、実際に植物の姿が見えるのはセキショウだけなので、皆さんもためつすがめつ。形が見えないだけに難しいというのが、感想でした。春にどのように芽や葉が伸びるのかと想像しながら行う「寄せ植え」作業の楽しみの一つなのでしょう。

さらに、少量の土を入れてサギソウの球根の植え込み。球根の黒い部分が芽なので、芽の部分を上にしながら空いている部分に形よく並べ、鉢の9分目位まで培養土を入れます。培養土に水苔が入っているため土が浮いていないか、割箸で鉢の隅を突き固め、培養土を落ち着かせて作業は終わり。難しい作業の連続だっただけに、終了後の皆さんは満足そうな顔でした。



最後に、自宅での栽培管理、とくに水遣りや日照等の注意事項の伝達があつて講習会は終わりました。

私達は自然に守られている

最近、次のような言葉に出合ってハッとしました。「自然保護なんていうけれど、それは人間の思い上がり。私たちのほうが自然に守られている」。この言葉は、自然保護を標榜する活動に関わる多くの人々が、改めて噛みしめてみる価値のある言葉ではないでしょうか。

これは「阿寒の母」と呼ばれた前田光子さん(1912-1983)の言葉です。前田さんはマリモで有名な北海道の阿寒湖周辺の豊かな自然とアイヌの伝統文化を守り抜いた方です。タカラジェンヌだった光子さんは、阿寒湖周辺の山林3600ヘクタールを管理する前田家に嫁いだことで人生が一変、「前田一步園」(現・一般財団法人)の3代目の園主になり、生涯をかけてリゾート開発など多くの自然破壊と戦い、大自然を守り続けたのです。

鳥の見張りをするオジサン

先日、岐阜に住んでいる友人から次のようなメールをもらいました。

「家から30分ほどの散歩コースに、水道山という海拔300メートルほどの山がある。天気の良い日には週に3回ほど登っている。町中の喧騒がウソのように静かな山道を登った頂上には展望台がある。そこに行くと、いつも望遠鏡とカメラを携えた同じオジサンがいる。「何をしているのか」と尋ねると、「鷹」の見張りをしているのだと

いう。なんでもこの辺りは鷹の通り道で、毎日、何羽通ったかを高山市にいる岐阜県のまとめ役の人に、パソコンで報告しているのだそうだ。こうしたネットワークが日本全国に張り巡らされていることがわかって面白かった。毎回、鳥の話聞くのを楽しみにしている」。

このメールの話をも、東京にいる「日本野鳥の会」会員の友人にすると、こうしたネットワークは全国のあちこちにあり、様々な人たちがいろいろな種類の鳥についてデータを集めているのだそうです。

最近、近くの祖師谷公園のせきれい橋の上で、ほぼ決まった時刻に空を見上げているオジサンをよく見かけますが、次の機会には、何をしているのか尋ねてみようと思っています。

いきものさんぽ

ヒメツルソバ
タデ科



ヒマラヤ原産。
ピンクの小さい
花が球状に咲きます。
葉にはV字形の模様
があります。

彩草会

編集後記

このところ、黄色いミモザの花が目立ちます。ミモザは「国際女性デー(3月8日)」の象徴だそうです。ミモザの花が下火になる頃、この編集後記を書いて75号の編集作業がほぼ終わります。そして桜の花の咲く頃になると、次の76号の編集作業が始まります。

75号作成に関わったメンバー

大泉定雄 片寄正史 北島明子 須永澄子
高梨麻実 田澤與光 野武一郎 宮下正雄